

前へ

この夏休み、私は、毎日、神戸市長田区の小学校に通いました。空き教室を利用した児童館の副館長として、子どもたちを見守っています。今年、特に暑い夏でした。若いころに比べ、疲れることも多くなりましたが、そんなとき、私は彼女のことを思います。

「彼女もがんばっている。」
いつも励まされている気がするのです。

三十五年前、神戸市内の中学校に勤務し、卓球部の顧問をしていた私は、新入生の彼女に出会いました。前年に、男女団体戦、個人戦すべてで神戸市大会を制覇したメンバーが卒業し、入れ替わりに彼女たちが入部してきたのです。

「体も硬いし、まだまだだな。」
彼女たちを見た最初の印象です。前年のメンバーに比べると、ずいぶん力が落ちるように思えました。そこで、これまで以上に彼女たちを厳しく指導しました。休みもありませんでしたが、彼女たちは弱音も吐かず、熱心に練習に取り組みました。実力もぐんぐん伸びていき、三年生の夏には、チームは近畿大会の決勝まで進みました。もちろん彼女はエースとしてチームを引っ張っていました。その後、彼女は実力が認められ、大阪の卓球の強豪校へ進学し、誰もが将来に期待をしていました。

ところが、高校に入学してまもなく彼女は異変に襲われました。ひどくに、それまで感じたことのない痛みと異常が起こり高校生の間ずっと続くようになりました。今までのように十分な練習ができませんでした。それでも、彼女は卓球をやめませんでした。レギュラーにはなれませんでした。精一杯球を追いかけてきました。卒業後は、銀行に勤め、卓球クラブに入りました。しかし、ひどい痛みはなくなるどころか、ますますひどくなってきました。

就職して五年ほど経った二十三歳のとき、全身の筋力が次第に弱っていく難病だという宣告を医師から受けたのでした。卓球どころか、普段の生活も難しくなり、最後には命を落とす可能性もあるという難病でした。彼女は生きる希望を失いかけてました。

でも、彼女は負けませんでした。そして自分にこう言い聞かせました。「くよくよしても治らないんだ。だったら、『前へ！』」
病気の進行を防ぐため、水泳を始めました。私のところに来て、生徒たちに卓球の指導をしたこともありました。障害者の卓球大会にも参加しました。

しかし、次第に球が遠くなっていきました。何でもない球に、手が届かなくなりました。「がんばらなければ。」という気持ちと、悔しくてどうしようもない気持ちの間で辛い思いをし、くじけそうになりました。

そんな彼女を立ち直らせたのは、やはり「卓球」でした。

いつの頃からか、正月に、私のところに、卓球部の教え子たちが集まるようになり、彼女も、毎年この同窓会を楽しみにしていました。でも、

そんな彼女が、この同窓会を二度休みました。一度目は、みんなに病気のことが言えなかったとき、二度目は、震災しんさいのあった翌年でした。

「車いすでは、みんなに迷惑めいわくをかけるだけ。」
と思ったからでした。

「何言うとなんや。」

彼女に声をかけ、次の年の同窓会から参加させたのは、彼女の先輩せんぱいや同級生たちでした。

今年の正月も、同窓会がありました。彼女は二次会へもいつもどおり参加しましたが、そこは古いビルの二階で、エレベーターもなく、狭い階段せましかありません。彼女が、

「車いすだと、みんなが大変だよ。場所を変えよう。」

と言ったのです。するとみんなは、彼女の乗った車いすを持ち上げ、こう言いました。

「わかった。俺達おれたちがもっと年を取って、車いすをかつげないようになつたら、そのときは、場所を変えよう。」

彼女はともうれしそうでした。そして、「明日があるさ」をみんなで歌いました。



彼女は今、六甲アイランドにある会社に勤めています。障害者仕様の右手がハンドル、左手がアクセルとブレーキになっているマイカーで毎日通勤しています。

「おはよう。」

「ありがとう。」

駐車場ちゆうじやじようで、同僚どうりやうの手を借り、車いすに移ります。今日も明るく、笑顔がほです。忙しい毎日ですが、いつも、「今日もがんばろう！」と仕事はたらに励んでいます。

病気はまだ治っていません。彼女は今も病気と闘たたかっています。でも、彼女は、いつでもエネルギーです。彼女は今、卓球の審判員しんぱんいんをめざしています。

「卓球は、私にとっての宝物。卓球があつたからこそ今までがんばってこられた。これからもがんばっていけるんです。いつまでも卓球に関わって、恩返しをしたいと思っています。」

「前へ！」

彼女の好きな言葉です。

